

論文の和文要旨

論文題目: 日本語とポーランド語の対照談話分析
～ 対人シフターの視点から ～

氏名: カチマレク・ミロスワバ

本研究の目的は、対人シフターという言語要素を日本語とポーランド語の会話において対照することである。対人シフターは、日本語とポーランド語を対照するのに、本論のために作成した用語である。以下では、対人シフター及びそれと関わる主な概念を紹介しながら、本論の要旨を章ごとに述べる。

対人シフター

対人シフターとは、対話する二人の話者の対人関係を標識として表示する言語形式である。ポーランド語では、話し手と聞き手をレフェラントとして指し示す動詞の人称形がこの機能を担う。日本語では、話し手と聞き手の領域を指し示す文末のスピーチ・レベルがこの機能を担う。また、自然会話では話者によって頻繁に交換されるため、会話の必要条件となり、各言語の敬語体系、またはそれと似たような役割を果たすものとは何らかの関係を示すものでもある。

対人シフターの談話機能

対人シフターの言語形式は日本語とポーランド語で異なるが、会話（談話）において果たす機能（談話機能）は類似すると考えている。なぜなら、構造の大きく異なる言語を対照するのに、言語形式のみを研究の対象にすることは不十分であると考えからである。本研究では、談話機能として話者間の対人関係を表す対人的機能を取り上げる。

対人シフターの交換パターン

本研究では、分析の対象となる日本語とポーランド語の言語形式は会話において一回のみ現れるものではなく、繰り返し現れるものである。つまり、二人の話者の間に頻繁に行われる対人シフターの交換パターンを言語使用と名づけ、日本語とポーランド語で対照する。

対人シフターの談話的意味

対人シフターの交換パターンを通して談話の対人的意味が形成されると理解している。そこで、対人シフターの交換パターンが生み出す対人的意味は、日本語とポーランド語で共通であると前提する。話者間の上下・役割関係（話者間の非相称的關係）を表すのは「上対下」と「下対上」というパターンがある。話者間の親疎関係（話者間の相称的關係）を表すのは「上対上」と「下対下」というパターンを分類する。

第1章では、まずなぜ対人シフターをテーマとする論文を執筆することになったかという本論の問題意識を紹介する。そこで、日本語とポーランド語の母語話者の間に起きているコミュニケーション上の問題、ポライトネス上の問題及び言語教育上の問題という三つの立場から本論の問題意識を紹介する。次に、対人シフターの定義を挙げ、その特徴について述べる。対人シフターの特徴として、直示的言語要素、対人的意味を表す言語要素及び、会話の結束性を保つ言語要素を認識する。最後に、本論の目的を明らかにし、また本論の意義を示唆するいくつかのポイントもあげる。

第2章では、本論における研究への三つのアプローチを紹介する。まず、文化心理学の観点から人工物としての言語使用について述べる。次に、ポライトネスの観点から欲求としての言語使用について紹介する。最後に、体系機能言語学の観点から選択としての言語使用について論じる。

第3章は、研究の動機となった聞き手敬語についてである。まず、日本語話者の聞き手敬語に関わる先行研究を紹介しながら、論じる。次に、ポーランド語の聞き手敬語表現と人称の関係について述べる。最後に、世界敬語の観点から日本語の敬語とポーランド語の敬語表現の位置付けを提案する。

第4章では、本論の仮説を紹介する。まず、対人シフターとフェイスの概念を結び付けて、仮説1を立てる。次に、日本語とポーランド語の会話における対人シフターの分布について仮説2を紹介する。最後に、日本語とポーランド語の対人シフター切り替え操作の頻度について仮説3を立てる。

第5章は、研究方法についてである。研究方法は、談話分析となるが、量的分析も質的分析も含んでいる。会話の場面として『教師と学生の個人面談』と『20代女性同士の雑談』という場面を設定する。なお、『20代女性同士の雑談』において「友人同士」と「初対面」という場面も設定する。次に、会話の参加者の情報、会話データの収集法、会話データの分析法及び会話データの妥当性に関する情報をあげる。

第6章では、会話データの分析結果を紹介する。まず、会話データの基本情報をあげる。本研究のために使用された全会話数は49会話がある。日本語の会話24会話、ポーランド語の会話25会話がある。会話データの文字化の結果において、日本語とポーランド語の会話の総ライン数は10521であり、総文数は8981である。会話データの平均文数において、日本語の会話169であり、ポーランド語の会話207であるという結果を得た。

6. 2. において、日本語の会話データの分析結果を紹介する。日本語の分析ターゲットIとして文末のスピーチ・レベル、分析ターゲットIIとして文末のスピーチ・レベルの切り替え操作を取り上げる。

6. 3. において、ポーランド語の会話データの分析結果を紹介する。その際、分析ターゲットIとして動詞の人称形、分析ターゲットIIとして動詞人称形の切り替え操作を取り上げる。

6. 4. では、日本語とポーランド語の会話データの分析結果を対照する。その際、日本語とポーランド語の分析ターゲットIIの結果のみを対照可能なものとして見なす。

『教師と学生の個人面談』の分析結果対照において、話者間の期待する上下・役割関係を反映する対人シフターの切り替え操作の使用割合は日本語よりポーランド語の方が高いという結果を得た。

『20代女性(友人)同士の雑談』の分析結果対照において、話者間の「親しい」という談話的意味をもつ「下対下」という対人シフターの切り替え操作の使用割合は、全切り替え操作において、日本語は96%、ポーランド語は32%という結果を得た。ポーランド語は日本語の結果を大きく下回るということは、ポーランド語の『20代女性(友人)同士の雑談』における「上対下」と「下対上」という対人的意味を表す対人シフターの切り替え操作の使用割合は日本語より高いという要因によると解釈する。

『20代女性(初対面)同士の雑談』の分析結果の対照において、話者間の上下・役割関係という観点から見れば「上対下」という対人的意味をもつ対人シフターの切り替え操作の使用割合は日本語の方がポーランド語より高い。他方、「下対上」という対人的意味をもつ対人シフターの切り替え操作の使用割合はポーランド語の方が日本語より高いという傾向が見られた。この傾向は、初対面場面における日本語とポーランド語の話者の心理状況を反映するものだと考える。つまり、日本語話者の「上対下」という言語行動の高い使用割合は、「下(カジュアル)のレベル」への欲望を反映すると解釈できる。他方、ポーランド語話者の「下対上」という言語行動の高い使用割合は、「上(フォーマル)のレベル」への欲望を反映すると解釈できる。

6. 5. では、第4章で立てた仮説の検定結果を示す。

仮説1の検定結果では、次のことが検証された。

類似するコンテキストで行われる日本語とポーランド語の会話では、似たような使用割合を示すという観点から見ると、日本語とポーランド語の対人シフターは会話の中に果たす機能について次のことが確認された。

- ① 日本語の敬体 (P) の使用 (聞き手敬語の使用) と、ポーランド語の動詞の1人称形 (FR) の使用 (聞き手敬語の不使用) は学生の発話において似たような使用割合を示すことから、会話の中で同じような機能を果たすといえる。つまり、ネガティブ・フェイスによる欲求を表す機能である。
- ② 日本語の常体 (N) の使用 (聞き手敬語の不使用) と、ポーランド語の動詞の2人称形 (SC) の使用 (聞き手敬語の使用) は学生の発話において使用頻度の近い数字を示すという結果から、会話の中で同じような機能を果たすといえる。つまり、ポジティブ・フェイスによる欲求を表す機能である。

仮説2の検定結果では、仮定した通り、対人シフターを含む発話は、全発話における使用割合という観点からすれば、日本語の方がポーランド語より多いことがわかった。すなわち、日本語の文末の敬体と文末の常体を含む発話の割合は全発話において58.8%を占めるという結果を得た。それに対して、ポーランド語の会話において、動詞の1人称形と動詞の2人称形を含む発話の割合は全発話において43.5%であることがわかった。

仮説3の検定結果において、仮定した通り、対人シフターの切り替え操作の頻度はポーランド語の会話より日本語の会話において高いという結果を得た。

すなわち、日本語の「(敬体) 対 (敬体) P/P」、「(常体) 対 (常体) N/N」、「(敬体) 対 (常体) P/N」、「(常体) 対 (敬体) N/P」という文末スピーチ・レベルの全切り替え操作の頻度は日本語の全会話において916であり、そして全発話文数において22%を占めることがわかった。

一方、ポーランド語の「(動詞の1人称形) 対 (動詞の1人称形) FR/FR」、「(動詞の2人称形) 対 (動詞の2人称形) SC/SC」、「(動詞の1人称形) 対 (動詞の2人称形) FR/SC」、「(動詞の2人称形) 対 (動詞の1人称形) SC/FR」という動詞人称形の全切り替え操作の頻度はポーランド語の全会話において720であり、そして全発話文数において15%を占めることがわかった。

第7章では、第6章で示した日本語とポーランド語の会話データの分析結果から、「上対下」、「下对上」、「上对上」、「下対下」という対人シフターの談話的意味の実例を示す。

まず、「上対下」と「下对上」という談話的意味は話者間の上下・役割関係を表すことがある。日本語では「(敬体) 対 (常体) P/N」と「(常体) 対 (敬体) N/P」、ポーランド語では「(動詞の1人称形) 対 (動詞の2人称形) FR/SC」と「(動詞の2人称形) 対 (動詞の1人称形) SC/FR」という言語形式の対立を通して形成される。

次に、「上对上」と「下対下」という談話的意味は話者間の親疎関係を表すことがある。日本語では「(敬体) 対 (敬体) P/P」と「(常体) 対 (常体) N/N」、ポーランド語では「(動詞の1人称形) 対 (動詞の1人称形) FR/FR」と「(動詞の2人称形) 対 (動詞の2人称形) SC/SC」という言語形式の対立を通して形成される。

第8章では、本論の要旨をまとめながら結論を述べる。そして、本論が示唆する今後の研究課題について提案する。